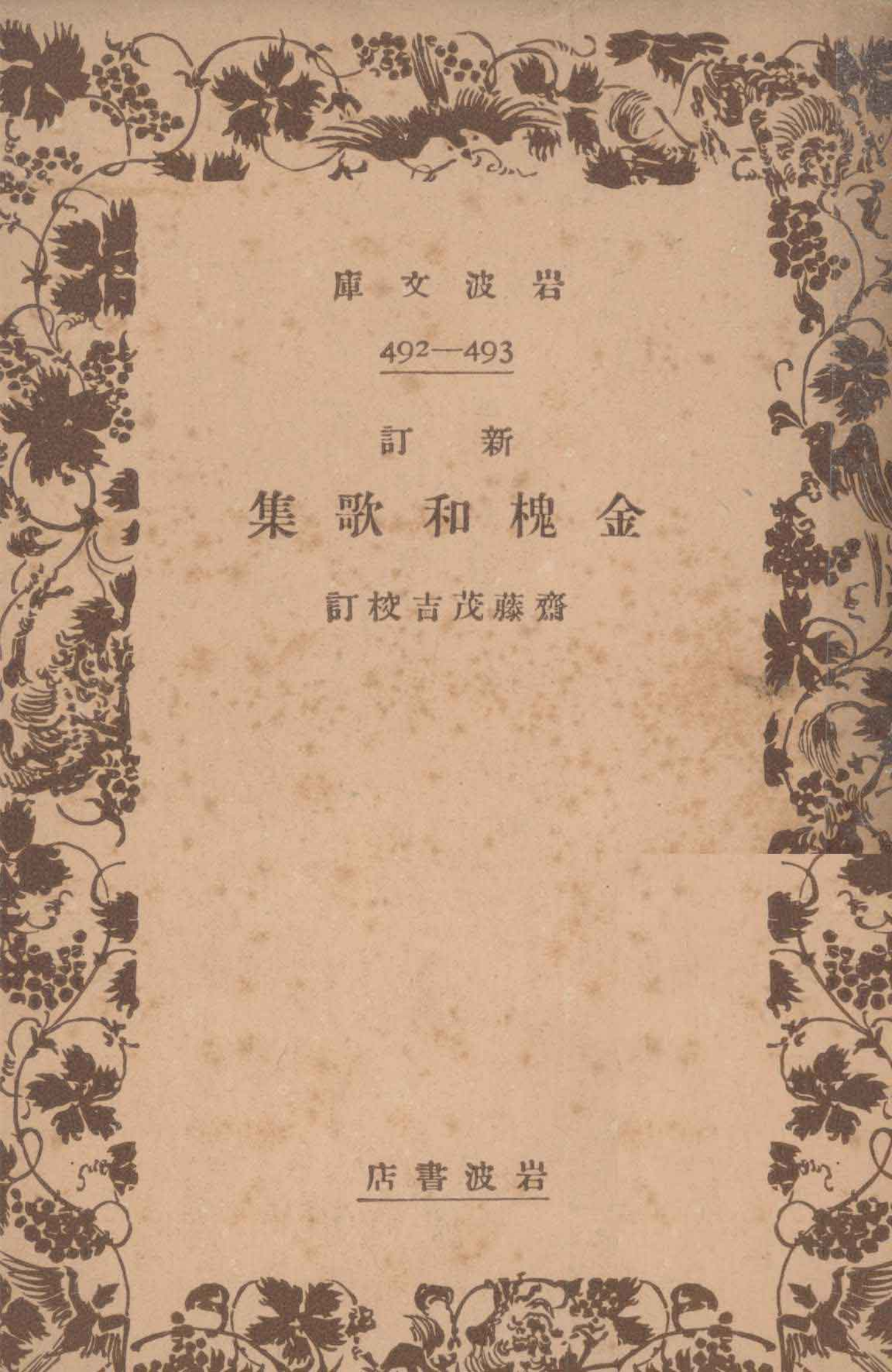




庫 文 波 岩

492—493

訂 新

集 歌 和 槐 金

訂 校 吉 茂 藤 齋

店 書 波 岩

(大森製本)

昭和八四一
和六四年二
昭四四年四
昭四年四月
五月廿五日
日五十五
日五十五
日五十五
印發三第
刷發行行
刷發行行

新訂 金槐和歌集 ★★

定價四十錢

校訂者

齊藤茂吉

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
菊地眞次郎

車 文 波 岩

492—493

株式會社秀英印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七・〇〇一八八番
九段 〇〇一八九・〇〇一八〇番
振替口座東京二六二四〇番

庫 文 波 岩

492-493

訂 新

集 歌 和 槐 金

版新補增

訂校吉茂藤齋



店 書 波 岩

凡 例

凡

一、「岩波文庫・新訂金槐和歌集」は、大體、「貞享本金槐集」を底本とし、「群書類従本金槐集」を以てその出入異同を校合し、加ふるに、賀茂眞淵が貞享刊行本を校訂した際に書入した評言を以てしたものである。

一、貞享本は貞享四年刊行の三冊本で、小中村博士の陽春廬記の藏書印ある帝國圖書館藏本（帝圖本）と略記した）

例

佐々木信綱博士が校訂されて、すみや書店から發行した鎌倉右大臣家集、これは飯田魚淵の寫本に基づいてゐる（飯田本）と略記した）

三輪田高房翁藏本の鎌倉右府歌集と題した寫本（三輪田本）と略記した）

三宅古城・本多阿伎良・森與里氏等校訂の金槐集（三宅本）と略記した）

その他住友氏舊藏本金槐和歌集、阿部次郎氏岡田眞氏藏本等、その他一二の書入をも參照した。

3

一、群書類従本は、原版群書類従を用ゐた。

一、なほ参考したのは、塚本氏校訂、「有朋堂文庫金槐集」。佐々木氏校訂「校註金槐和歌集」。半田氏校訂「定本金槐和歌集」等である。

一、賀茂眞淵の評言は、飯田本、帝國本、三輪田本によつて多少字句の相違がある。それを盡く記したところもあり、一つを代表せしめて他は省略に従つた場合もある。

一、賀茂眞淵の、「鎌倉右大臣家集の始にしるせる詞」は賀茂翁家集所載のものにした。この文章は、多少の異同を以て二三傳はつてゐる。

一、附録の「鎌倉右大臣家集中抜粹」一冊は三輪田翁珍藏に係つたもので、「明治十五〔年〕十一月十三日京都ニテ得之。三輪田高房」と記してある。この抜粹は、上記の飯田本・帝國本・三輪田本などと幾らかちがふ點があるので興味がある。このたび三輪田輪三先生の恩借を得て附録としたものである。

一、この岩波文庫本金槐和歌集の如き形式の校訂は、稍わづらはしき觀があるとも思ふが、かかる校訂本が世に一冊ぐらゐあつてもいいと思ふのである。

目次

卷上

春部.....七

夏部.....三九

秋部.....四九

冬部.....七八

卷中

戀部.....九八

卷下

雜部.....一二五

○

鎌倉右大臣家集中抜粹.....賀茂眞淵.....一六五

鎌倉右大臣家集の始に記るせる詞.....賀茂眞淵.....一八九

索引.....一九三

定家所傳本に據る校訂増補.....二三五

解説.....二六三

金槐和歌集 卷上

春部

正月一日よめる

今朝みれば山も霞みて久方の天の原より春は來にけり

賀茂眞淵此歌に〇印を附す（飯田本・帝國本・三輪田本）

春のはじめの歌

九重の雲井にはるぞ立ちぬらし大内山に霞たなびく

類從本に題「立春の心をよめる」とあり。眞淵〇印を附し、「中さだの歌なり」と評せり（飯田本）

山里に家居はすべし鶯の啼く初聲の聞かまほしさに

うちなびき春さりくればひささ楸かたやまおふる片山かげに鶯ぞ啼く

類従本に「春のはじめの歌」といふ題あり。眞淵評「萬葉に打なびく春とあり、うちなびきてふ語は別なり冠辭考にくはし」(飯田本)「萬葉に打なびく春とはいへり、打なびき春といへる例はなし、冠辭考に其ことわり委し」(三輪田本)

春のはじめ

かきくらしなほ降る雪のさむければ春とも知らぬ谷の鶯

類従本に題「春のはじめに雪の降をよめる」とあり。眞淵。印を附す(飯田本・帝國本)、印(三輪田本)

春は先づ若菜つまむとし標め置きし野邊とも見えず雪の降れれば

類従本に初句「春たたば」新千載集に入り結句「雪は降りつつ」。眞淵。印を附す(飯田本・帝國本)、印(三輪田本)

故郷立春

朝がすみ立てるを見ればみづのえの吉野の宮に春は來にけり

續後撰集に入る。眞淵〇〇印を附す（飯田本）〇印（帝圖本・三輪田本）眞淵評「後世みづのえのよし野の宮とよめるは何ともなきことなり、此公もさる誤を傳へてよみ給ひしにや、されど公の歌の樣を思ふに古へにこそより給はめ、さらばみよし野のよしのとつづけしこと古事記よりこのかたの例により給ひけめ」（飯田本）「後世みづのえのよし野の宮とよめるには、何にもなき事なり、此公もさる誤りを傳へてよみ玉ひしにや、されど公の歌のやうおもふに古人にこそより玉はめ、さらばみよしののよしのとつづけしこと古事記よりこのかたの例なれ」（帝圖本）「みづのえのよしといふことはなし此公はみよしののよしのとつづけ玉へりけんを後に誤りけめ」（三輪田本）「みづのえのよしといふこと古くはなしこはあやまり也」（三宅本）

イといふことをよめる

海邊立春

鹽釜^{しほがま}の浦の松風かすむなり八十島^{やそしま}かけて春や立つらむ

類從本には雜の部にあり。眞淵評「はた中さだ」（飯田本）題イ類從本。

子日

いかにして野中の松の古りぬらむ昔の人の引^{イは}かずやありけむ

類從本には雜の部にあり。第四句「人は」

霞

おほかたに春の來ぬれば春がすみ四方の山邊に立ちみちにけり

類從本に題「霞をよめる」とあり。

み冬つき春し來ぬれば青柳の葛城山に霞たなびく

新勅撰集に入る。眞淵〇印を附す（飯田本・帝國本）、印（三輪山本）眞淵評「青柳のかつらぎ山とよめるはただ冠辭なるを春の歌につづけ給へるは是も後の誤りにならひたまへるか、さもあらずばこの歌はよし」（飯田本）「萬葉に青柳のかつらぎ山とよめるはただ冠辭なるを春の歌につづけ玉へるは後の誤にならひ玉へるか、さもあらずば此歌はよけれど猶萬葉のすがたは得て語をしり玉はねばおぼつかなし」（帝國本）

おしなべて春は來にけり筑波嶺の木もごとくに霞たなびく

鶯

ふか草の谷のうぐひす春ごとにあはれむかしと音をのみぞ鳴ノ

類従本には雑の部にあり。眞淵評「此二くさはむかし思ふよしありてよみたまひけん」(飯田本)

草ふかき霞の谷にはぐくまるうぐひすのみやむかし戀ふらしイム

類従本には雑の部にあり。第三句「春ぞもる」

花間鶯

春くればまづ咲く宿の梅の花香フをなつかしみうぐひすぞ鳴く

類従本に題「花の間の鶯といふ事を」とあり。眞淵。印を附す(飯田本・帝國本)、印(三輪田本)

雨後鶯イといふ事を

春雨の露もまだひイムず梅が枝にうは毛しをれてうぐひすぞ鳴く

類従本に第二句「まだひぬ」とあり。眞淵評「露もまだひすは後拾にもある言葉ながら、此公のはふさはず」(飯田本・帝國本)「まだひず、後なり」(三輪田本)題イ類従本。

雪中若菜

若菜つむころもでぬれてかた岡のあしたの原イハに淡雪アハユキぞふる

類從本に題「雪中の若菜といふ事を」とあり。第四句「原は」。眞淵。印を附す（飯田本・帝國本）、印（三輪田本）。結句「淡雪」なれども「あわ雪」とすべきか。

屏風の繪に若菜つむ所

春日野のとぶ火の野守^{のもり}今日とてや昔かたみにわか菜つむらむ

類從本に「若菜つむ處」とあり。眞淵評「昔かたみの句わろし」（飯田本・帝國本）

屏風の繪に春日山に雪ふれるところ

松の葉のしろきを見れば春日山木の芽もはるの雪ぞ降りける

類從本に題「……ところをよめる」眞淵評「木の芽もはるの句此公の心に似ずはじめの歌ならむ」（飯田本・帝國本）

残雪

春來ては花とか見えむおのづから朽木のそまに降れるしら雪

新勅撰集に入る。眞淵評「花とか見らんと有りしなるべし、見えんとはこの歌は冬の歌と聞ゆ、萬葉にも見らんとはよみたり。朽木に花を用ゐられしはまだしきはじめの歌なり。イはじめ歌なら

ん」(飯田本・帝國本) 類従本には雜の部にあり。

雨そぼふれる朝に勝長壽院の梅ところどころ咲きけるを

見て花にむすびつけ侍りし

イにナシ
イつけし哥

古寺のくち木の梅もはるさめにそぼちて花もほころびにけり

眞淵評「くち木の梅、是は用様あしからず」(飯田本・帝國本) イ類従本。

梅の花をよめる

梅が枝にこほれる霜やとけぬらむほしあへぬ露の花にこほれる

類従本には結句「花にこぼるる」とあり。「露の」原本「霜の」とあり。類従本による。

春風はふけどふかねど梅の花さけるあたりはしるくぞありける

眞淵。印を附す(飯田本・帝國本)、印(三輪田本)

梅の花さけるさかりを目のまへにすぐせる宿は春ぞすくなき

わが宿の八重やへの紅梅こうばい咲きにけり知るも知らぬもなべてとはなむ

眞淵○印を附し「紅梅を音にていはれしはよろしからねど、かかはらぬ所に器量あり」と評せり(飯田本・帝國本)

咲きしよりかねてぞをしき梅の花ちりの別はわが身と思へば

類従本には一本及印本所載歌中にあり。眞淵評「ちりのわかれはの句此心のちの様なり」(飯田本・帝國本)

わが袖に香をだに残せ梅の花あかで散りぬるわすれがたみに

さりともと思ひしほどに梅の花散りすぐるまで君イハが來まさぬ

眞淵評「さりともは後なり」(飯田本)

鶯はいたくなわびそ梅のはなことしのみ散るならひならねば

故郷梅花

年ふれイドば宿は荒れにけり梅のはな花はむかしの香に匂へども

眞淵評「一二句はよし。四句此公にふさはしからず」(飯田本・帝國本) 原本「年ふれど」を本文とす。傍註及類従本による。

故郷にたれしのべとか梅の花むかしわすれぬ香ににほふらむ

類従本に第二句「しのぶとか」とあり。

誰にかもむかしをとほむふるさとの軒端の梅は春をこそ知れ

續拾遺集に入り、第四句「梅も」とあり。眞淵〇印を附す(飯田本・帝國本) 評「中さだのうちにてはよし」(飯田本) 「中さだの歌なり」(三輪田本)

梅香薰衣

梅が香はわがころもでににほひ來ぬ花よりすぐる春の初風

眞淵評「花より過ぐるの句後なり」(飯田本・帝國本・三輪田本)

梅花風に匂ふといふ事を人々に詠せ侍りし序についで

梅が香をゆめの枕にさそひきてさむる待ちける春のはつかぜ

類従本に題「……人々讀せ侍し次に」下句「さむる待けり春の山風」とあり。眞淵評「夢の枕、こ